

# 四高における音楽部の創設 — 石倉小三郎に集う洋楽愛好者たち —

Foundation of the Music Club by the Fourth High School Students in the Meiji Era  
— Kosaburo Ishikura and the devotees of music —

井上好人  
Yoshito INOUE

## 〈要旨〉

高等教育機関に在学する学生が、文芸や音楽など多様な趣味に関心を寄せ、校友会のサークルとして活動を行うようになるのは明治後期になってからのことである。1900年代のスポーツ・弁論・雑誌ブームに続き、哲学や人生問題を語り合うキャンパスライフの芽生えである。その過渡期の時代にあつて、音楽部はどのように成立したのだろうか。そして、西洋音楽に親しみ活動に参加することは彼らにとってどのような意味をもったのだろうか。

小論では、旧制第四高等学校（以下、四高）の音楽部の成立時期にスポットをあて、彼らの音楽活動とこれを周囲で支えた人々との繋がりを考察した。すると、石倉小三郎の四高赴任、教授会での西田幾多郎の行動、学生のリーダー築瀬成一の活躍、そしてキリスト教関係者たちの支援といった姿が浮かび上がってくるだろう。これらのことから、当時の学生にとって音楽活動がどのような社会的な意味をもっていたのかについて検討を加えた。

## 〈キーワード〉

旧制高校、学生文化、洋楽受容

## 1 はじめに

日本における西洋音楽の受容と普及は、旧制高校から大学へと進学していったエリート学生に負うところが大きいといわれる。西洋音楽に親しみ自ら活動に参加することは彼らにとってどのような意味をもったのか。小論は、旧制高校、特に第四高等学校（金沢）の音楽部に焦点を絞り、学生の自主的な活動を支えた人々との繋がりに焦点をあて、彼らの音楽活動の社会的な意味について検討したい。

## 2 四高音楽部の前史～「音楽隊」記録～

第四高等学校は、石川県専門学校を前身として1887（明治20）年、金沢市に第四高等中学校として設立された。1893（同26）年10月、時習寮が開設。1894（同27）年、高等学校令により第四高等学校に改称、大学予科（一部：文科、二部：理科）と医学部が設置されて出発した（1901年に医学部は金沢医学専門学校として分離独立）。校友会の始まりは、1893（同26）年の「第四高等中学校校友会」であり、『校友会雑誌』が刊行されている。その後、「校友会」解散の後を受け「北辰会」が結成され、『北辰会雑誌』が

刊行されている。

さて、四高学生と音楽との関わりだが、初期のものとして、校友会としての音楽部ではない「音楽隊」としての活動記録が、『北國新聞』明治32年4月17日付記事「第四高校春季端艇競漕會」に登場している。

それは、春の恒例行事となっていたボートレースの会場である大野川に設営された仮屋に控えた「音楽隊」が、レースの狭間に演奏したというものである。この「端艇競漕會」での「音楽隊」の編成やメンバーは全く不明であるが、「此間音楽隊の奏樂は嚙唳として水面に響き渡り轉た心地を澄ましむるなど來會者に興を添へたり」<sup>(註1)</sup>と記事にあることから、所謂“鳴り物”だけではないブラス隊であったと推察される。

ところで、日本におけるブラスバンドは、日清戦争時の軍楽隊の流れを汲むものと、キリスト教の救世軍によるものと2つの潮流がある。

明治二十年代は反欧化主義の風潮が支配的で、洋楽の普及という点からは受難の時代であった。そんな中、日清戦争の戦意鼓舞が音楽需要を高め、前者の軍楽隊の流行をも

たらした。東京音楽学校を卒業した音楽家たち、小山作之助をはじめ山田源一郎などが数多くの軍歌を手がけ（例えば、山田源一郎編『大捷軍歌（全7編）』1894年）、新しく編成された音楽隊（ブラス）が歓送迎や慰安会のイベントに駆り出され演奏することが流行したのである。東京少年音楽隊（1894（明治27）年創設）のような少年を集めた音楽隊<sup>（注2）</sup>が生まれたのはこの社会風潮を背景にしており、「音楽をみせもの視して美事な服装とか或は美少年等を集めることに腐心した」（三浦、351頁）ことでもて囃され、演奏曲目は、軍歌調の歌曲のほか、ワルツ、ポルカ、マーチにまで及んだ。

また、後者のような、キリスト教の伝道目的として初めてブラスバンドが編成されたのは、救世軍においてであり、1895（明治28）年の集会であったと言われる。「コルネットと伝えるラッパが用いられ、快活勇壮にして面白かりき」と、堀内敬三が『音楽五十年史』の中で引用しているように、当時の新聞に報道されている。この流れは、1898（明治31）年、石井十次（1865-1914）が行った孤児による音楽隊や音楽幻灯隊の活動にも引き継がれている。

四高「音楽隊」は、このような2つの洋楽流行を背景にその影響を受けて編成され、学生行事に興を添えたとみるべきだろう。

### 3 四高音楽部創設のエピソードと第一回演奏会

#### 3-1 石倉小三郎の赴任と西田幾多郎の挙手

では、校友会のひとつとして位置づけられた「音楽部」の設立はいつ、どのような経緯によってなのだろうか。同部設立については、次のようなエピソードが伝えられている。

四高学生の中に「音楽部」創設の話が持ち上がったのは、石倉小三郎が四高に赴任したのがきっかけである。新たな部の設立には教授会の認可が必要であった。至誠堂で行われた教授会で、発起人数名も列席しその代表である小林鉄太郎（後、代議士、鶴岡市長）が雄弁を振った後、校長が賛否を問う多数決をとった。築瀬成一はこの時の模様を次のように回顧している。「その時真ッ先に手を挙げたのは、デンケン西田幾多郎先生であった。それに見習ってか全教授が一斉に手を挙げたので、茲に目出度く音楽部は創設されたのであった。」「その当時は、音楽などというものは、質実剛健の気風にもとるものだという風潮が一般にあった時代だったから、音楽部の創設は、大いに危ぶまれたのであったが、西田先生のお蔭で無事成立したわけで、今日から見ると、まことに隔世の感がある次第である。」（築瀬成一（明治42年卒業（農））の回顧、『四高八十年』66頁）と。

上記のエピソードをもとに、当時の経緯を仔細にみてみよう。

石倉小三郎は、ドイツ文学者。一高から東京帝大・独文科へ進学し、卒業後、東京音楽学校講師を経て、四高に赴任した。（その後、1911（明治44）年に八高、1918（大正7）年に七高に赴任。八高では漕艇部を創設し初代部長を務めた。）一高在学時は、音楽部設立者のひとりに名を連ね、東京帝大では「ワグネル会」を結成、そして、東京音楽学校の学生と合同で「オペラ研究会」を結成し、グルック作曲のオペラ「オルフォイス」の公演では日本語訳を担当している。また、シューマンの〈流浪の民〉の名訳者として後世に名を残し、ケーベル（Koeber, Raphael von, 1848-1923, ドイツ系ロシア人。東京帝大で哲学や美学を講義し、東京音楽学校ではピアノや音楽史を指導）の薫陶を受けた高弟のひとりとしても有名である。このような西洋音楽のパイオニア的存在であった彼が、東京音楽学校講師を経て四高に赴任した早々、音楽部委員長（教員）を嘱望されたというわけである。

石倉小三郎と西田幾多郎、この2人の尽力を彷彿させるエピソードは、また、学生の洋楽愛好が、知性と教養に則するものであり、同時に気高い精神性を希求する意志とも結びついていることを連想させる。当時の旧制高校の校風と文化における教養主義的变化、という背景もこれを了解する背景として充分である。

だが、我々がこれらイメージとリンクさせて音楽部創設を理解するのは早計ではないだろうか。精神性や人格の形成と絡めた音楽聴取がことさら囁くなるのはもっと後になってからのことではないだろうか。

#### 3-2 明治期の洋楽受容の歴史性

この点について、戦前の洋楽愛好家を調査した加藤善子（2005）の論考が示唆に富む。加藤は、明治期に洋楽に親しんだ学生たちの多くが、卒業後は関わりが薄くなってしまった一方で、例外的に、卒業後も大学に残った大学人が外国語と西洋文化の学問的知識と共に音楽愛好を続けたのではないかと指摘している。彼らが学生愛好家たちをリードしながら、洋楽が大学の研究者コミュニティの中で独占的に維持されていった、という推論である。戦前の洋楽界のオピニオンリーダーが東京音楽学校出身の演奏家ではなく、旧制高校から帝大を出た評論家たちであった理由も、このような歴史性から説明できるとしている。

つまり、洋楽愛好という趣味の範疇に属する個人的な事柄が、（旧制高校の場合）学内に集う人間相互の关系的な領域として形成され維持されてきたということである。とするならば、当時の四高にあっては、あるいは金沢の地にあっては、洋楽受容のチャンスとなるどのような人間関係があったのだろうか。

四高勤務時代の西田幾多郎が洋楽に親しんだという記録

は残っていない<sup>(注3)</sup>。山口高等学校勤務から四高時代にかけて、「禪に明け禪に暮れる日常」(『祖父西田幾多郎』101頁)を過ごしていた彼にとって、気晴らしといえ、山口時代では「フートボール」(俗に「山口ボール」と呼ばれ、独自のルールをもったサッカー競技で、教員、生徒の間に流行していた)や、四高時代ではテニス、遠足、雪中兎狩りといった運動であった。交友関係は、英語やドイツ語の教員が多く、山口時代は、戸川秋骨(英文学。明治学院で北村透谷、島崎藤村と同級、のち雑誌『文学界』を創刊)、アルフレッド・チャルトンなどであった。だが、注目すべきことは、キリスト教(関係者)との関わりが深かった点である。

四高時代には、富永徳磨(1875-1930)などの牧師と交遊を深め、また、自身が主宰した三々塾からは<第四高等学校出身の植村門下の三羽ガラス>と謂われた逢坂元吉郎、高倉徳太郎、秋月致の3人の学生を育てている。さらに、実際に入信を勧められてもいた。(「昨年来持川女史時々来訪せられ余及び家内にキリスト教の教を勧めらる。同女史の厚意余深く之を感じす。されともいかにせん、余はキリストの教を喜ぶも、もはや之によりては救はるゝの必要なきを」(明治34年2月19日、山本良吉宛の書簡。『西田幾多郎全集 第十八巻』52頁)。

この関係から、キリスト教会への出入りも少なからずあり、1905(明治38)年2月19日、西田は、金沢石浦町教会の青年会で講演を行っている。こうした演説会では、讃美歌やオルガン演奏が添えられることが多かった。例えば、明治32年4月に広坂のメソジスト教会で催された「基督教青年会演説会」の様子は次のようであった。

「基督教青年会演説会は去る廿二日夜廣坂通メソジスト教会に於て開けり。弁士は英語デー、ノルマン氏(勝利の人)通訳、原野彦太郎氏、私立金澤女学校教授長谷川峯吉氏(青年と基督教)にて同夜はダンロツプ氏オルガンを奏し通常讃美歌の外外国人の唱歌等ありしと」<sup>(注4)</sup>(『北國新聞』明治32年4月25日付)

したがって、西田も教会で讃美歌をはじめとする音楽に接する機会が少なからずあり、彼が洋楽への興味と理解を昂じた可能性はあるだろう<sup>(注5)</sup>。とするならば、四高・音楽部の設立からその後の活動に至る過程において、金沢のキリスト教関係者との関わりや支援がなかったとはいえないのではないだろうか。このことを検討する前に、同校音楽部のメンバーと彼らによる演奏会の模様を再現し、音楽部への他学生のまなざしがどのようであったのか見てみよう。

### 3-3 音楽部の第一回演奏会

「音楽部」の結成当時のメンバーは、次のようであった。まず、教師側の音楽部委員として、石倉小三郎(委員長:ドイツ文学)、西川巖(委員:英文学)。学生の部員として、築瀬成一(福島県出身、二部、農、M42卒→東大・農)、鈴木憲太郎(群馬県出身、二部、工、M42卒→東大・工)、小林鉄太郎(山形県出身、三部、医、M41卒→東大・法)、猪俣昌蔵(神奈川県出身、二部、工、M41卒→東大・工→鉄道技師。1928年、スイス国ジェノバにおいて開催の第十一回国際労働総会における政府代表委員を務める。)、寺崎良策(新潟県出身、二部、農、M43卒→東大・農→造園技師。大正4年明治神宮建造のための明治神宮造営局に参画。京都府立植物園主任技師。)、磯野充章(富山県出身、一部、法、M41卒→東大・法)、秋山真男(山梨県出身、二部、農、M42卒→東大・農)、海部次郎(東京出身、二部、薬、M42卒→東大・薬)、である。

同部の中心的な存在であり、ヴァイオリンをよく奏した築瀬成一は、「南下軍の歌」の作曲者としても有名である。

さて、その第一回演奏会は、明治40年、「電燈燦爛たる至誠堂」にて、午後6時に開演された(9時過ぎ閉会)。演奏者9人、来会者300人あまりであった。出演者は次の通りである。築瀬成一:「四高音楽會の絶才」、「當夜は本會の指導者として、殆ど君が獨舞臺の觀があつた。」、猪俣昌蔵:「盛んに美声を振つた」「我がボーカリストの泰斗」「吾人は君が朗々として清美なる妙聲に、陶然として酔うが如き心地を感じた」。その他に、寺崎良策、外国人教師ガントレット、外国人教師エルンスト・ウォルフアルト(在職 M.35.1-T.10.7):ヴァイオリン、外国人教師カール・スタインル(ドイツ語、在職 M38.7-T.5.7):ドイツ民族楽器チター、宣教師の息子アーサー・マッケンジー:オルガンが加わっている。

演目は、君が代、ヴァイオリン合奏「怒れる勇士」(ウェーベルン)、ヴァイオリン連奏「ロンド」(マザス)、合唱「郭公」:オーストリア民謡・カッコウ、ドイツ国家(Die wacht am Rhein):「ラインの護り」(第一次大戦までドイツを代表する軍歌・愛国歌)、イギリス国歌(God Save the King)、以下、略。そして、「最後に単簡なる閉會の辞があつて、至誠堂も破れよと許りに、校歌を三唱して散會」した。

この音楽会の講評を『北辰會雑誌』は次のように書いている。

「本校創立以来此の種の会合は、之が嚆矢であらう。吾人は、嬉れしき新春の宵を、靄々の気に溢れ、瓏々として進みゆく楽音に、恍惚として憧憬し、無我の境に神遊して、共に一夜の歓楽を盡したのであつた。」「設備の不完全なるに関らず、練習の不十分なるに係らず、かばかりの成功を

告げたのは、実に吾人の狂喜に堪えざる所であつた。」「全曲悉く非常の喝采を博制し、多大の満足を以て歓迎せられたと言ふの外はない。」

以上のように、演奏会は非常な好評であつた。同じ至誠堂を会場とした他部のイベントと比較するならば、例えば、明治38年頃の語学部、講話部、演説部が開いていた会での参加者は三〜四十人であり、「殊に演説部の如きは茶菓を饗すと称して會衆を集めんとし亦失敗せり」(『北辰會雑誌』40号、明治38年4月17日発行)という状況と比べれば、この夜の演奏会は大盛況であつたといえるであろう。

ただし、この日の招待客に「婦人の影の認められ」たことが、その後、音楽部存続を巡って物議を醸すこととなる。

#### 4 音楽部への批判と廃止の論

音楽部は創設当初から、これを快く思わない学生からの批判に晒されていた。

『北辰會雑誌』第53号(明治41年12月)に、「B生」のペンネームにて「音楽部の将来に就て」という投稿が掲載されている。これは、音楽部を巡る諸学生の意見を汲み取り、その将来を憂う、という論を展開したものであつた。その論旨を以下に箇条書きでまとめてみよう。

- ・最近、音楽部を廃せよとの声が一部の人士によって唱えられている。寒潮事件の際にも、静勝館の生徒大会で、「音楽部廃せざる可らずと絶叫せる一熱血児ありし」。
- ・音楽部が設立されて1年、その間、僅かに1回の演奏会と数度の楽典講義があつたのみで、未だ実績がないばかりではなく、七百の会員から反響があつたというわけでもない。果たして、音楽部の必要はあるのだろうか。実績の無さを部費が少ないせいにするな。部費が音楽部の半額である演説討論部が近來いかにすさまじい活動をしているかを見よ。
- ・例えば、相撲は運動会の際に多大の賛同と人気を集めているので、相撲部を創立しても差し支えない。
- ・「過激なる音楽部廃止論者は、絶対的に音楽その者の価値を疑ひ、音楽部を以て腐敗漢の団塊なりとさへ貶す。」
- ・穏健な意見としても、「音楽部の存立は、目下の北辰校に於て其必要を認めず。」なぜなら、「北辰校は目今の処、一意専心校風の樹立に盡すべきの時機にあれば、従來の如き、醇良なる校風を樹立する上に、假令害ありとも益なき音楽部の如きは、其存立を要せず」。
- ・第一回演奏会で、「我神聖なる至誠堂に婦人の影の認められしを以て甚だ不快事とし、密に唇を噛みし潔癖児ありし」
- ・音楽部が洋楽のみで和楽を全く導入しないのは誤っている、という意見がある。

- ・「要するに従前の音楽部は、少くとも我北辰會員のすべての賛同を得て存在せる者に非る事は、明らかなる事実とす。」
- ・「B生」の意見としては、「予を以て之を見れば、音楽部その者は決して無用の贅物にも非れば、又腐敗分子の結塊にも非ずして、やり方に依りては、随分我校風発揚の上にも裨益あらしむ可きものなるを以て、切角起したるものをムザ〜と廃止する必要は無かる可しと信ず。」
- ・「此際一大改良と発展とを企図せずんば、音楽部の将来は誠に危からんのみ。敢て数言を費して、音楽部委員の猛省を促す所以なり。」

このような「B生」の批判は、どの程度当を得たものだったのだろうか。このうち、「部費は僅に音楽部に半する彼演説討論部」の記述について少し検証してみよう。

そこで、「明治四十一年北辰會費決定計算書」をみてみる。ここには、[音楽部:予算額 2,000 決算額 5,483]、[演説討論部:予算額 5,500 決算額 7,849]、と記載されており、音楽部のほうが予算額、決算額ともに演説討論部よりも少ないことがわかる。他の部費と比較しても、最大の予算額を誇るのは、雑誌部の378,400であり、これは、雑誌発行の実費が多大である為、致し方ないだろう。次いで、ロケット部とベースボール部がそれぞれ、133,900 124,550と突出している。全13の部(講話部、演説討論部、語学部、音楽部、雑誌部、弓術部、剣道部、柔道部、ベースボール部、ロケット部、フットボール部、遠足部、漕艇部)の部費全体に占める音楽部予算の割合は、わずか0.2%足らずに過ぎないのである。

このことから、「B生」の論をはじめとした、音楽部活動への批判は、同部の校友会活動への貢献度——例えば、「醇良なる校風」の発揚といった観点——が、費用対効果の面から小さいという疑念から生じたものであつたとしても、印象論の域を脱するほどのものではなかつた。(尤も、音楽活動の成果は、運動部の対外試合のような勝敗で測られるものではないことは周知されていたことだろう。)

では、彼らの忌避感は何に由来するものなのか。ひょっとして、洋楽に興じるという行為そのものが、多くの学生にとって相容れないハビトゥスとして反発心を生じさせていたのではないか、あるいは、洋楽に集う人々への違和感・警戒感というものが冷ややかなまなざしを生んでいたのではないだろうか。

そこで、洋楽に対する懷疑や忌避観のような心性がなぜかくも四高学内に漂っていたのか、この点について次節で検討してみよう。

## 5 キリスト教関係者の関与と支援

そこで、四高音楽部創設のエピソードも含め、戦前期ではない明治期の音楽愛好を取り巻く歴史性を考慮しながら再度、さきの音楽部第一回演奏会の演奏記録を読み直してみよう。

すると、共演者として「宣教師の息子・アーサー・マッケンジーのオルガン」、「ガントレット先生」の名があることに気づく。アーサーの父・マッケンジー（MacKenzie, Daniel Rial, 1861-1935）は、1888（明治21）年、カナダ・メソジスト教会から自給伝導隊の一人として来日し、第四高等中学校の英語教師として金沢へ赴任している（在職 M.21.1-M.24.3, M.31.1-M.31.7）。彼は、自宅でも語の聖書会を開いて青年伝道を開始し、四高教師の職を辞した後、カナダ合同教会の宣教師となり、1893（明治26）年に日本メソジスト教会金沢部会長、そして、1907（明治40）年当時は、白銀教会で活動していた。（後に、関西学院理事。子息のアーサーも同学院教授となり、父子で関西学院創立時の恩人となった。）

ガントレット、G.E.L. (Gauntlett, George Edward Lockman, 1868-1959) は、1890（明治23）年、本郷中央会堂の聖歌隊長兼オルガニストとして来日したイギリス人である。山田耕作の義兄（耕作の姉、恒と結婚）であり、耕作はこの義兄から音楽を学び関西学院から東京音楽学校へ進むきっかけになるのである。1900（明治33）年、岡山の六高に英語教師として赴任、その後、「四高から頻りと懇望され」（『七十七年の思ひ出』）、明治40年春に四高に赴任、英語を担当した。翌（同41）年、気候が寒冷な為か肺炎カタルを患い、7月にウラジオストックに転地、そのまま山口高等商業学校へ転勤している。

父・マッケンジーとガントレットの間には親密な交友関係があり、その繋がり、本郷中央会堂（明治23年創立）を設立したカナダ・メソジスト教会の宣教師イービ、C. S. (Eby, Charles Samuel) に辿りつく。ガントレットが日本に招かれたのはイービの意向によるものであることからして、ガントレットとマッケンジーの繋がりがこのイービを介してのものであることが了解できる。本郷中央会堂は、一高や東京音楽学校の学生たちへの布教目的で本郷に建設した教会であり、1893（明治26）年、島崎赤太郎が音楽学校卒業後、初のオルガン演奏会を開いた会場でもある。「ガントレットは学生が大好き」で、島崎の教会オルガン演奏にはガントレットの承認と支援があったと推測されている。「当時の東京音楽学校をとりかこむ周辺の状況には、キリスト教各宗派の活発な宣教活動が非常に強く影響していた」（赤井励『オルガンの文化史』116頁）のである。

## 6 仮説としての「まとめ」

このように辿っていくと、明治期の四高音楽部は、単なる教員と学生の自主的な活動域を超えて、金沢のキリスト教関係者との交流を含んだ、もっと広い交際圏の中で位置づけられていたことが推察できる。

日本における洋楽受容の窓口は、従来から指摘されているように、①軍楽隊、②式部寮雅楽伶人、③文部省音楽取調掛→東京音楽学校、④キリスト教諸派、の4系統あった。これらは、「それぞれ別個な機関であるには違いないのですが、同じ外国音楽を学ぶ団体として密接な交流を行っており、これら機関全体が日本の洋楽の発達に協同し、あるいは競い合っただけで一体となって貢献したというのが実際の姿です」（中村、1996、632頁）と言われている。

旧制高校をはじめ高等教育機関に在籍する学生たちの洋楽愛好とその形式の広がり、学生が、野球やボートレース、テニスなどのスポーツ文化の普及・形成において主体的に関与していったのとは、その経緯が随分異なる。それぞれの学生が、上記いずれかの窓口と密接な関わり合いを保つ中で、ようやく学校内の同好の士が集まり、組織化されていったのである。

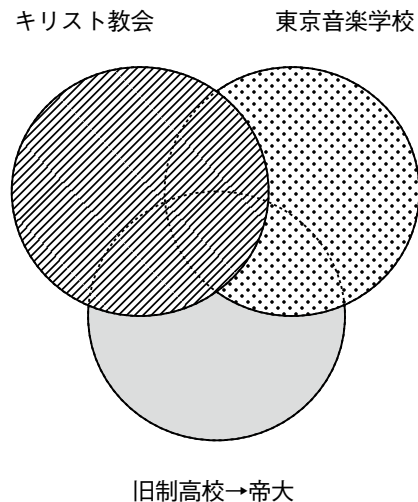


図 明治期の洋楽愛好者の位置づけ（理念型）

彼らの占めるポジションを図示すれば、上図のようになるであろう。（東京の高等教育機関に在学する学生の場合を理念型で示した。）同図は、高等教育機関に在籍する洋楽愛好者が、キリスト教会、東京音楽学校、そして、校内の音楽サークル、の3つのエリアに多かれ少なかれ関係するポジションにあり、それぞれから影響を受けながら活動を行っていたことを示している。例えば、フランス文学者で『星の王子さま』の翻訳で有名な内藤濯（1883-1977）は、明治36年、一高に入学した洋楽愛好家である（魚住影雄と寄宿舎が同室だった）。熊本県出身の彼が音楽と出会った

のは、上京後に在籍した開成中学校の恩師・佐々木祐継（青山学院予科出身、英語・地理・唱歌担当、後にユニテリアンの指導者）によるものであった。1年間の一高休学後、同37年から再編入、音楽部の消滅期間中だったせい、彼の洋楽愛好はユニテリアン教会の「惟一倶楽部」の音楽部員としてテノールを歌い、ヴァイオリンを奏することで続けられた。同倶楽部には他の一高生の名前もある。

文学者の洋楽愛好についてみても、島崎藤村（1872-1943：明治学院、キリスト教者）は明治学院で賛美歌に親しみ（明治20-24年）、「あらゆる芸術を味へるだけ味はうといふやうな若い量見をもつて」、明治31年、東京音楽学校選科に入学している。ピアノを習う一方で、シューマンの『音楽と音楽者』やバッハの伝記などを読み浸った。また、藤村と同じ『文学界』同人であった上田敏（1874-1916：一高→東大）は、最初の<sup>(注6)</sup>一高音楽部の部員であり、東京音楽学校、本郷中央会堂、青年会館で熱心に音楽を求め、批評家としても有名になった。

音楽部の校友会内部での足場の脆弱さは、同部員たちの多くが、このような学外との関係が深かった点にも由来するのかもしれない。

ところで、彼らとキリスト教関係者との交流は、演奏会だけでなく日々の練習や指導などでも頻繁であったはずなのに、なぜ、回顧録などにそのことがあまり書かれなかったのだろうか。

キリスト教と宣教師が、西洋文化移入の窓口として我が国の欧化政策に切り離しがたい地位を占めていただけでなく、個々人の態度や嗜好の形成に広範な影響を及ぼしてきたことは、近年、小学唱歌と讃美歌の関係や西田哲学とキリスト教の関係など、指摘されつつある。外国人教師や宣教師の人格的陶冶や彼らの背後にある西洋文化の精神的素養の吸収に期待して、新しい知識階級の若者たちが集まってきたという側面はおそらく大きいであろう。そして、当時において、キリスト教は、西洋文化の担い手としての意味以上のもをもちえない、と割り切っていた人々もいたであろう。だが、洋楽愛好者たちの回顧録での沈黙は、日本

人のキリスト教経由の欧化に対する忌避と羨望という二重性の深層心理が含まれていることを暗示しているようにも思えるのである。

## 注

- (1) 「囀り」：りゅうりょう、楽器・音声がさえてよく響くさま。「轉た」：うたた、転た、いよいよ、ますます。
- (2) 少年音楽隊の流れは、1909（明治42）年、三越少年音楽隊、同44年には名古屋のいとう呉服店（現：松坂屋）による少年音楽隊（現：東京フィルハーモニック交響楽団）、1912（同45）年の大阪三越少年音楽隊、そして、白木屋（東急百貨店日本橋店）による「白木屋少女音楽隊」となって結実する。
- (3) 西田幾多郎の四高在職期間は、1896（明治29）年～1909（同42）年。
- (4) 原野彦太郎はメソジスト教会の宣教師、ダンロップ Dunlop, John Gaskin（1867-1932）も、カナダ・メソジスト教会宣教師であった。ダンロップが、明治32年に大聖寺、小松地方を伝道して歩いた記事が残されている。「ダンロップは、・・・大聖寺、山城、小松等にて演説及び幻燈を試みしに、是又何れも盛んなりし由。小松には農学校、中学校あれば望み多し」（「小松教会史年表」）
- (5) 四高では、学生によるキリスト教系修養団体「青年倶楽部」が、明治29年に設立されたという記録がある。
- (6) 一高の「最初の」音楽部設立は、明治25年であり、このときの音楽部は明治29年に廃止に至っている。

## 参考文献

- 山田耕筰、1985、『はるかなり青春のしらべ』かのう書房。  
 西田幾多郎、1966、『西田幾多郎全集 第十八巻』岩波書店。  
 西田静子・上田弥生、1948、『わが父西田幾多郎』弘文堂書房。  
 上田久、1978、『祖父西田幾多郎』南窓社。  
 安田寛、1993、『唱歌と十字架』音楽之友社。  
 上杉知行、1988、『西田幾多郎の生涯』一燈園燈影舎。  
 赤井励、1995、『オルガンの文化史』青弓社。  
 野村光一・中島健蔵・三善清達、1978、『日本洋楽外史』ラジオ技術社。  
 田辺尚雄、1965、『明治音楽物語』青蛙房。  
 ガントレット恒、1989、『七十七年の思ひ出』大空社。  
 中村理平、1996、『キリスト教と日本の洋楽』大空社。  
 加藤善子、2005、「クラシック音楽愛好家とは誰か」渡辺裕／増田聡ほか『クラシック音楽の政治学』青弓社、143-174頁。